

入選

テーマ3…多様性を認め合う社会をめざして 「受け入れることが難しくても」

駿台甲府高等学校通信制課程2年 駒井 奏美

「多様性を認め合う社会なら、多様性を受け入れられないという意見も尊重すべきだ」。SNSでそのような内容のつぶやきを見かけた。タツプしてみると、そこにはたくさんさんの賛成意見が寄せられていた。見ているうちに私の頭は、疑問でいっぱいになった。

「この話、おかしくないか？」

つぶやいた人は多様性を認められないという気持ちも多様性の一つだと言いたかったのだろうか。確かに受け入れられない人がいても、おかしくない。皆が皆、多様性を身近に感じて生きてきたわけではないし、無理やりその人達の意見を変えようとすれば、また違う問題が生じてしまう。私がおかしいと感じたのは、誰かを否定している意見を多様性に含み、認め合ってしまうということだ。多様性を認め合う社会とは、それを否定する意見も多様性として受け入れる社会ということではなく、個性を持って生まれ窮屈な社会から孤立してしまっただけの人々を救いあげするための社会だと思っただけだ。

私には車椅子生活をしている祖母がいる。若いころ病気を患って以来、何十年も車椅子と共に強く生きてきたかっこいい人だ。祖母は近所の商業施設へ、いつも車椅子で出かけていた。しかしリニューアルオープンを機に店内が狭くなり、車椅子では行けなくなってしまったという。その話を聞いた私は、悲しみに胸がいっぱいになった。今たくさんのメディアで、多様性をテーマにした内容が取り上げられている。多様性という言葉が広まる一方、身近なところで障がい者の祖母が生きづらさを感じている現状。多様性を認め合う社会を目指している人など、本当はいないのではないか。私の中でそいつは悲しい考えが生まれてしまった。

そんな思いを抱えたまま、ある日私がバスに乗っていると車椅子の男性が乗ってきた。バス停には多くの人が並んでおり、男性がスロープを出してもらっているのを皆が眺めていた。車椅子を使っている人がスロープを必要とするのは当然のことなのだが、健康な人達よりも少し乗るのに時間がかかってしまう。その場面を見ていた私は、SNSで見つづやきと祖母の体験談を思い出した。バス停の人達はもちろんしてイライラしているのではないか。暗い考えが浮かび目をつむりたくなったその時、時間がかかって申し訳ない、と車椅子の男性がバス停の人達に向けて頭を下げた。何も謝るようなことをしていない人が、なぜ謝罪などしなければならぬのか。謝らなくていいと伝えなければと思いい席を立とうとすると、それよりも先に誰かが声を上げた。

「謝らなくて、いいのよ」

「大丈夫でしたか。足元に気をつけてくださいね」

それは、周りの人達の温かい言葉だった。見れば、乗客や待っている人の中に嫌な顔をしている人は誰もいなかった。皆が車椅子の男性へ向けて、優しい笑顔を向けていた。私は思わず泣きそうになった。この世にはいろいろな人がいて多様性を認めてくれる人もたくさんいるのだ、と初めて気がつけた。

全員が多様性を認められる社会を作るのは、正直とても難しい。だが、私が出会った人達のように、既に多様性を受け入れ暮らしている人もいる。日本は確実に多様性を認め合う社会へ近づいていると思うのだ。そしてもっとその社会へ近づくためには、皆が「多様性を知ること」が必要だ。世の中にはどんな人がいて、どんな助けを必要としているのか。多様性を認められない人達も、まずは知ろうとしてほしい。自分と違うものや未知のものを受け入れるのは、とても怖いことだと思う。しかし、少し知るだけでも途端に恐怖は興味に変わる。この変化が多様性を認め合う上で本当に大切だと思っただけだ。

多様性を認め合う社会、すなわち生まれれてくるすべての人が生きやすい社会が、いつか訪れることを心から願っている。